

横芝の碑

(その一〇二)

横芝に建っている一

第十七代横綱小錦の墓石

第十七代横綱小錦八十吉が横芝町出身であることをご存知でも、その墓石が横芝町に建っていることは案外知られておりません。

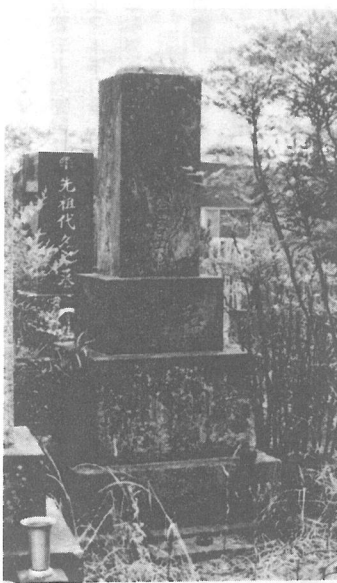
小錦は、俗に上町と言われている、松尾町金刀比羅様寄りに在る岩井家から、東京の藤本家に養子に入っていますので、その遺骨が分骨されて、東京と横芝の二か所に墓石が建っているのです。

明治の始め、上総国武射郡横芝村の料理店主で岩井弥市という人がおりました。生まれつき体が大きく、力も強かったので、そのころはやっていた宮相撲の大関にま

で推されるほどでした。

その弥市の長男で八十吉、これが父によく似て幼い時から丸々と太り、腕力も勝れていました。それだけに力業が大好きで、近所の子供達と相撲や組み打ちなどをやって遊んでも、一度も負けたことがありませんでした。また、よく父に連れられて宮相撲見物に出かけました。

十二、三歳になると、おとな達と相撲を取ることがありましたが、三度に一度はおとなを負かすほど強くなりました。そうした様子を始終眺めていた弥市は「どうだ八



二代目小錦が建てたという小錦八十吉の墓石。



江戸っ子の血を湧かせ、錦絵にまでなった。

十吉、お前本当の相撲取りになるか」と尋ねました。「うん、なりたい」と二つ返事でうれしそうに答える姿に、よし、家業は次男の清吉に継がせて、八十吉には力士修業をさせて見よう」と決心しました。伝手を求め、八十吉を伴って東金出身の、初代高砂浦五郎の門を叩き、懇願の末、目出度く入門を許されました。慶応三年生まれの八十吉が、十四歳の春を迎えた明治十三年のことでした。

好んで入った道でしたが、番付一番違つと虫けら」と言われた相撲の新弟子修業は殊の外厳しく、特に八十吉は入門一年余りで、脚氣に罹り、一時不本意な帰郷という不幸に見舞われながらも、稽古に次ぐ稽古。忍耐と勤勉、そして、先輩や親方の教えを忠実に守る素直さは、間もなく番付に表われてきました。

明治十六年、小錦の醜名で初

土俵を踏んだ八十吉は、六年目の二十一年には前頭九枚目に入幕しました。そして翌年には、早くも小結となり三役入りを果たし、二十三年には、関脇の座を飛び越して大関に昇進するという異例の出世ぶりでした。

この間、体重は一二四kgほどありましたが、身長は僅か一七八cm弱という小錦は「小兵の俺は唯稽古で業を磨くだけだ」と稽古と鍛練に励み、自ら編み出した速攻と果敢なとり口で、遙かに大きい相手手を攻め込み、殆んど負けを知らぬ有様は、江戸っ子の血を湧かせました。加えて丸々とした色白の好男子であったので、いやが上にも人気を煽り、その立姿は錦絵にまでなり、店に出るとすぐ売り切れてしまったということです。

その人気や評判にも驕ることなく、ひたすら相撲道一筋に節制精進を続け、次第に人格識見、体技

も卓越して、明治二十九年(一八九六)三月、相撲界の「日の下開山」第十七代横綱を允許されました。

横綱在位四か年、明治三十三年の夏場所を限りに引退して、年寄二十山を襲名、相撲協会取締役や検査役などを歴任、その傍ら、新弟子の養成に努めました。その円満な人柄は、関係者の誰れからも信望されていました。大正三年、相撲の講演旅行中に四十九歳の若さで病歿しました。戒名は、震天揚威武徹居士。

写真は、岩井家の墓所に二代目小錦が、初代小錦(八十吉)の意志を体して建てたという、横綱小錦の墓石で、正面には戒名が、上の台座には岩井、下の台座には、横綱小錦と刻まれています。そして裏面には、山形県西田郡三泉村、二代目小錦 後藤鶴松之建等と刻まれています。(□の所は判読不能文字)

この墓所は、周辺に他家の墓所もありますので、あえて案内図を省略しました。見学等の場合には、役場広報係、または、筆者(電話二一〇七六二)にご連絡をお願いいたします。(写真の錦絵は、故押尾喜世治氏「元文化財審議会委員」から頂いたものです)

町文化財審議会委員

小沢春光氏寄稿